

エストニア特集 2021

エストニア演劇を知る

～歴史と現在～



エストニア  日本を繋ぐ
オンラインレクチャー

【in 日本】ゴコクジスタジオ

【in エストニア】元NO99オフィス

エストニア特集

エストニア演劇を知る

～歴史と現在～



2021年10月28日 (木) 18:30~22:00 (Zoom)

1日目

シアターNO99設立当時のエストニアおよび ヨーロッパ演劇事情。目標と方法論。

■ 実行委員を代表して山上優より挨拶

○山上 みなさま、こんばんは。ご参加ありがとうございます。オンライン開催となりましたが、本日から3日間『エストニア特集』を実施して参ります。この企画はほぼ1年前に立ち上げまして、これまで開催方法について、講師の方々とほぼ1年、話し合いをして参りました。実際に来日して頂きたかったですし、講師のおふたりもそう強く望んでおられましたが、今回はオンライン実施となりました。ですが、来日を前提としたオンライン・レクチャーということになります。対面の場合は、同じ空間で講師と参加者の方々が出会う瞬間がとてもワクワクします。今回はオンラインではありますが、直接Q&Aをできるタイミングをつくりますので、出会いの機会にさせていただければと思います。よろしくお願いいたします。

17

■ 講師の紹介

講師のおふたりを紹介します。ティート・オヤソーさんと、エネリース・センベルさんです。通訳をさせていただきます、横尾ルツタス 紫苑さんです。よろしくお願いいたします。パネリストの紹介をします。日本美術家協会、OIATAT理事の佐々波 雅子さんです。

それでは講師の方にお渡し致します。通訳・横尾さん、宜しくお願い致します。

○エネリース こんにちは。このような機会を頂き大変光栄に思っています。エストニアの現代演劇、そして私たちのシアターNO99についてお話しします。

私は舞台アーティストである一方、コンテンポラリーアーティストとして、ギャラリーで個展を開催したり、ビジュアルアーティストとして世界的に活動してまいりました。

コンテンポラリーアーティストとして世界を飛び回っている間、さまざまな世界のアーティストと出会い、そこでの経験が約15年前にシアターNO99を設立する大きなき

っかけとなっています。美術家としての視点が、演劇を創る上での大きな基本のひとつになっています。

○ティート ティート・オヤソーと申します。この機会を頂き、ありがとうございます。エネリースとは対照的に、純粹に演劇に関わってきました。大学で演劇を学び、大学を卒業してからは教員として大学に戻ったりしつつ、おもに演劇をつくる側としてやってきました。

■ エストニアについて

エストニアの演劇、シアターNO99について話をする前に日本とエストニアの関係について少しお話したいと思います。エストニアは日本の8.5分の1の国土、人口は100分の1という小さな国です。人口130万人が広々と住んでいる空白の多い国です。

エストニアはバルト海に面していることから西欧の国から見て地理的に重要な位置にあると言えるでしょう。約800年前にドイツの侵攻を受け、700年間ドイツの体制下がありました。1600年代にロシア帝国の侵攻も受けていますが、ドイツの貴族たちがエストニアに多く残り、完全にロシア化されたわけではありません。

1800年代に入ると、他のヨーロッパ諸国と同じく民族意識の形成が見られるようになりました。例えば、その時代になりますとエストニア独自の新聞の発行、そして演劇も活発になってきました。民族主義のなかで一番重要なのがエストニア語です。さまざまな国の体制下にあったので、エストニア語は農家の一部の人々に使用されていましたが、民族化を経て現在は正式な言語として認められるようになりました。

約100年前から、演劇の専門家（プロフェッショナル）が現われるようになりました。その後、1940年にソ連に占領・編入されましたが、エストニアにおいて演劇は、とても重要視されていました。人口が3,000～4,000人だとエストニアでは大きな都市とされ、都市には国営の劇場、劇場の建物、独自の劇団がきちんと配置されています。ソビエト連邦の監視下にはありましたが、厳しい監視の対象とならないような内容で、なおかつ行間から読み取ることができるようなメッセージ性のあるものが目標となりました。

1991年にソビエト連邦から独立しましたが、社会主義からの奪還ということもあり、演劇界の事情も変わってきました。内容のみならず、経営に重きが置かれるようになりました。

コロナウイルス感染拡大前の話にはなりますが、小さな国でありながら、1年間で100万人が観劇するというデータがあります。エストニアには15の国営劇場があります。そのうち2つはオペラ・バレエ専門劇場になります。

15の劇場は、レポートリーシステムで、年間で決まった劇を上演する仕組みです。国営劇場では1/3から1/2は利益を自分たちで生まなくてはならないという状況です。国営劇場のほかに、2倍から3倍の私立劇場があります。それらは国の援助もありますが、基本的には個々で経営しなくてはなりません。

■ シアターNO99について

それでは、シアターNO99について話します。2004年に首都タリン市にある国営の小劇場が経営難に陥りました。政府はその劇場の改革のためにコンペを催しました。コンペでは新しい芸術監督が求められただけでなく、新しい哲学をもって経営を一新する必要がありますがありました。

国営劇場ということで文化省の管轄になるのですが、私たちの冒険はこんなジョークから始まりました。ティートの携帯からエネリースが文化省に「コンペに参加します」とメッセージを送ったのです。その基本には、コンテンポラリーアートの世界で活動してきたエネリースの経験をもとに、演劇だけの枠にとどまらない考え方がありました。沢山の参加者の中から、コンセプトが評価され、2004年の末に劇場を本拠地にすることができました。私たちの理念としては、社会的に問題意識の高い劇場、今日の社会について話す劇場というコンセプトを持っています。

財政難に陥った小劇場の再生ということで、さまざまな困難がありました。先ず、それまでいた人材を解雇して、新しい人材を自分たちで選び直しました。感情的にもなりますし、難しい決断ではありましたが、今から思うとその時点で出来た最善の策でした。

■ NO99という名称について

NO99という名称について、お話します。99という数字は、エストニアの哲学者ハッソ・クリュル

(Hasso Krull) という人のエッセイの中の発想に基づいています。

その随筆のアイデアというのは、人間というのはひとつずつ年を重ねていくのですが、数字は終わりがあるわけで、本当は時間に終わりがあるのだという概念になります。

例えば、太陽の寿命が5万年あるとして、ひとつ数字を下げて49,999とすると、少し怖いような感覚になります。時間に制限があると考えて、99という番号からはじまり、作

NO99
theatre | www.no99.ee

品を1つつくるごとに数字を減らしていくようにしています。

というわけで、作品は99、98、と数えていくわけですが、今回は91の作品から紹介します。

■ ストーリー性を超える主題

○エネリース 一般的な話になりますが、劇場で稽古が始まる前に台本が渡され、配役が決まり、台本を読み込んでいくというプロセスがあると思います。私たちのコンセプトとしては、シアター（劇場・演劇）が物語を語る場ではなく、それ以上の場になるようにと考えています。

99が劇場名ですが、劇場がひとつの芸術作品になるようにできればと思っています。99から始まっていく作品群全体が作品となるようにしたいのです。演劇をつくる上で一番大切なのは、ストーリー性を超える主題の選択になります。

次にその主題をどのように広げていくか、方法を考えていきます。手法はいろいろと挙げられますが、

- ① 俳優の身体的言語・表現と精神
- ② テキスト、台本の内容といった言語的な面
- ③ 空間的側面 俳優がどこにいるのか、どのような環境にいるのか
特定の場所や、劇場という限定された空間であることもできます。空間を決める際には、現実に基づいたもの、あるいはイメージした抽象的なものの2つがあると考えます。
- ④ 音響・舞台照明
- ⑤ 全体構成・リズム 主題に基づいた様式を選ぶ際も、ビデオや写真、ギリシア悲劇のように韻を踏んだセリフの引用や合唱などありますが、概念と深く結びついており、意味づけが必要です。

シアターNO99の設立時の話で説明したように、自分たちの理念に合致した俳優を自分たちで選びましたが、様々に異なる様式の作品の中でも同じ俳優がいることがこれから見るビデオでわかると思います。

大半のパフォーマンスは私たちが0（ゼロ）から作ったもので、主題も私たちが選んだものです。主題を言語化する過程は、台本から出発するわけではありません。フレーム化された枠組みの中で、即興という手法を用いてきました。

今日のプランとしては4つの作品にフォーカスしたいと思います。ビデオを交えながら、それぞれの違いを紹介します。

■ NO91 King Ubu 『ユビュ王』

最初の作品はティートが紹介したとおり、NO91です。

こちらは台本をもとにしたものではありませんが、劇場や都市から外れていくということを主題としました。基にした台本はフランスのシュルレアリズムの作家アルフレッド・ジャリ（Alfred Jarry）の作品です。内容を少し紹介しますと、ユビュ（Ubu）という低能な統治者の人物を中心に話が展開します。ユビュが王位欲しさに王家の人々と関わっていく話です。主題は「権力」パワーが挙げられます。

（※編集者注）『ユビュ王』は、アルフレッド・ジャリ（1873年～1907年）が15才の時の戯曲。23才になった1896年に初演・出版されている。「merdre（くそつたれ）！」という台詞で始まり、ブルジョア社会を痛烈に批判し、大スキャンダルを巻き起こした作品。不条理劇の源流としてシュールリアリストたちに高く評価された。小説『超男性』なども翻訳されている。

上演の場所は、都市から離れた場所、エストニア西部にある、ソビエト連邦時代の軍用機の格納庫を使用しました。現在は廃墟となっている軍用飛行場の4つの格納庫を使用しました。作品の内容と、場所のアイデアはとても意味があったと考えています。

NO91は2006年初演で、新しいことへの挑戦で俳優も情熱的でエネルギッシュでした。脱構築的手法を使い、舞台上での人物の外見にも拘りました。布で顔を覆い、人形のような造形にしてみました。主人公のユビュが白い布でくるまれた原始的な存在として現われます。

この作品は、ミュージカルの要素もありましたので、エストニアで有名な歌手を主人公としてオファーしました。他の役はシアターNO99所属の俳優で、若くエネルギッシュです。またラッパー/作曲家にオリジナル音楽を依頼しました。



それではビデオをご覧くださいますが、少し補足説明をします。

1つ目のビデオは、ユビュが権力を崩壊し、また自らが権力を握るために秘密結社をつくるシーンとなります。

では、1つ目のビデオ“King Ubu #1”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○通訳 事前にビデオの説明をしてからどのビデオを見て頂くか指示致します。次のビデオは、4つあるうちの2つ目。飛行機の格納庫でのシーンになります。お金のためにプロレタリア階級が権力を持っている貴族階級を首吊りの刑に処するというシーンです。それでは“King Ubu #2 #3”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

次は、4番目のビデオ“King Ubu #4”です。エストニアでは独立記念日に大統領のスピーチがあります。VIPたちが官邸に招待されてコンサートの後スピーチが行われます。その行事にインスパイアされたシーンになります。ユビュの、空虚で極端にフォーマルな演説、を強調しています。それでは“King Ubu #4”をご覧ください。



(ビデオ鑑賞タイム)

それでは2つ目の作品、NO83（2009年上演）について解説します。

また異なった主題、社会におけるアーティスト（芸術家）の立ち位置、その重要性に主題を置いています。前作から3年の間にたくさんの活動を通して、成長した自分たちの芸術家としての立ち位置から話します。

ここから、エネリース氏がまとめた解説を通訳がお話させていただきます。（注：エネリース氏が事前にまとめた内容、台本を通訳が読み上げる形式）

■ NO83 How to Explain Pictures to a Dead Hare

『死んだウサギに絵を説明する方法』

NO83『死んだウサギに絵を説明する方法』（2009年）という作品についてお話しします。ドイツのコンセプチュアルアーティスト、ヨーゼフ・ボイス（Joseph Beuys）の同名のパフォーマンスからの引用です。ギャラリー内のガラスの壁の向こうにボイスが死んだウサギをもってあらわれ、絵の説明をするのを観客がみている、というパフォーマンスです。

シアターNO99の作品の主題として、1990年代から2010年代にかけての芸術家の社会的な立ち位置とその変化についてです。時代の流れの中で大きな変化が見られます。

○エネリース 当時の文化大臣（文化大臣の名前が、偶然、エストニア語で「ウサギ」の意味）のスピーチの内容が新聞等に掲載されます、実際に行われたスピーチの文言を引用し舞台でも使用しました。

それではビデオを見て頂きます。NO83『死んだウサギに絵を説明する方法 #1』舞台上の文化大臣が「芸術は人をより良く賢くする」と言います。

「私をより良く賢くしてください」という人に芸術家がやって来てキスをする、というシーンになります。

（ビデオ鑑賞タイム）



23

○翻訳・読み上げ 次のビデオタイトルが短縮されています。“How to Explain #2”です。エストニアで著名な美術史家の、芸術におけるアヴァンギャルドの重要性とそのリスク（何か新しいことをするときの責任の重さについて）を語っています。次のシーンでは人間の形をしたウサギが展覧会場にいます。そこへニンジンを手にした女性が入ってきます。芸術作品の鑑賞を続けるか、ニンジンに興味を持つかというウサギのジレンマのシーンとなっています。



(ビデオ鑑賞タイム)

それでは次のビデオに移ります。エストニアでは文化大臣がスポーツ担当大臣も兼任しています。様々なスポーツの場面を即興で見せているシーンです。スポーツの結果は、計測が可能です。その観点から文化芸術より明白で分かりやすいということが言えるでしょう。それでは、#3、3番目のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

それでは次のビデオに移ります。4番目のビデオです。

俳優は自身の創作で何を求めているか。どうすればその場所に新鮮にいられるのか。どうすれば完全にその時空にいられるのか。俳優は哲学的、抽象的な観念も持っている。次のシーンのポイントは「どうすれば他人を傷つけずにソファの上に立っていられるか」です。それではご覧ください。



(ビデオ鑑賞タイム)

アーティストに扮した俳優が抽象的な話題について議論をし、その後、10人が同じソファにしようとする、その後また同じ疑問について話し合う、というシーンでした。

それでは次に5番目のビデオです。完全な即興のシーンです。言葉を用いない身体的な即興です。

即興はある意味チャレンジですので失敗のリスクも伴います。芸術のあり方、即ちリスクを背負いながらどう新たなクオリティを求めるか、という主題。私たちの芸術のあり方を考えるときにこのシーンは必須だと考えました。本作品は世界で100回以上上演されましたが、この即興の場面は毎回大きなチャレンジです。何も決めないで10人の役者が舞台上で自由気ままに行動するという事は、予想外の結果を導くことになりま。それではご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

それでは次のビデオに移ります。この作品の最後のビデオになります。舞台上の文化大臣のスピーチの場面になります。

モノローグの翻訳を紹介します。

■ 文化大臣のスピーチ

○**翻訳・読み上げ** 文化大臣「あなた方とお話したいのです。ここにいらっしやい。あなた方にお伝えしたいのは、物事は良い方向へ向かうものではなく、悪い方向に向かっていているということ。

今、丁度打ち合わせがあったのですが、お金はやはり大切なものです。エストニアの人々にとっては大変な時代です。ですからどうかして芸術の存在価値を証明しなければなりません。お分かりでしょう。実験的なことに時間を費やしている暇はないのです。安定を求めています。

今現在の重要な問題は何でしょう。そう、創造産業、クリエイティブ産業です。あなた方が協力的でないなら、私だって上からの援助をいつも提供できる訳ではないのです。

ひとつ、再現して差し上げましょう。私は予算を制定します。そしてあなた達にその予算を与えます。そしてあなた達はこう思います。このお金をどう使えばよいのでしょう。そして私はそのお金をあなた方が使う前に一部、取り上げてしまいます。そうすればあなた達はその予算をまた一から組みなおさなければなりません。

その間、私はこちらで新しい予算ができたと言記者会見を開いて発表します。その情報の後、取り上げた予算をまたあなた達に戻します。そうすればあなた方は皆、私に感謝するでしょう。

このように今、文化は回っているのです」という、文化大臣のスピーチの場面となります。

それでは本作品最後のビデオ、6番目のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

前半部分は当時の文化大臣が実際のスピーチで述べたこと、後半は彼女が実際にしたこと、の言語化です。

○**エネリース** 1人の俳優が犬のような役を演じていたと思います。これは90年代ロシアの著名なパフォーマンスアーティストのアイデアです。様々な場所で、自分を人間ではなく犬として表現するという事で有名になりました。

ここで前半終了となります。

<休憩>

○エネリース それでは後半を始めます。

■ NO72 The Rise and Fall of Estonia 『エストニアの繁栄と衰退』

次の作品はNO72（2011年）、『エストニアの繁栄と衰退』です。先ほどの『死んだウサギに絵を説明する方法』とは大きく異なる作品です。この作品ではビデオを表現手段として用いました。よく演劇の場で見られるのはビデオ映像を背景として使用していますが、ビデオをより意味のあるものとして使いたいと考え創作しました。人間の内側から出る感情を媒介するものとして位置づけました。

1台のカメラでカメラマンが動き回るとするのが通常ですが、私たちは4台のカメラを使用しました。それぞれのカメラは俳優の演技を把握して動いています。

音響、照明を含め、全てのスタッフはどのカメラに向かっていつ俳優が演技するのかを秒単位で把握していました。この作品でビデオを用いた要因として、より多くの観客に向かって訴えかける、という目標がありました。我々の劇場ではなく、1,700人収容できるコンサートホールを使い、リアルタイムで上映を行いました。



作品の上演に際して、観客はシアターNO99の劇場近くにあるコンサートホールにいます。俳優も最初は観客と同じ場所にいますが、始まると、彼らはシアターNO99に移動して劇場で演技をします。劇場は撮影スタジオのように模様替えしました。

「エストニアの繁栄と衰退」が主題ですが、鍵となるのは民族としての記憶、個人と当時の状況を表す関係となります。例えばソビエトの占領というのが個人にどのような影響を及ぼしているのか、エストニア人がなぜ閉鎖的なのか、なぜ声を大にして自分の考えを表現しないのかというような内容になります。政治的な要素を表現するために、個人を中心に考えました。

それでは通訳から解説してもらいますが、上演中のビデオについては時差なく、その

場で撮影されているリアルタイムの映像である点を強調しておきます。

○**翻訳・読み上げ** 作品の主題は、エストニア人の民族意識と個人と政治との関係にあります。上演時間は約2時間。観客は劇場から約200メートル離れた1,700人収容できるコンサートホールの大画面でビデオを鑑賞します。

シアターNO99の劇場はブラックボックス（黒塗り）の劇場ですが、客席を取り去り、映画の撮影スタジオのように改装して、エストニア人のある一軒の家というセットを組んでいます。このような、演劇のライブ中継というのは、今でこそコロナの影響で広まっているかと思いますが、技術的に簡単なことではありません。映画撮影のようにカメラと俳優の間に監督がいて、常に指示を出せるというような状況ではないので、すべてのスタッフ・俳優がフレームワークを熟知していなければなりません。俳優の演技の全てのキッカケを把握しておく必要がありました。

組まれたセットの中で、俳優が空間を移動するだけでなく、大道具の移動、衣裳替えも何度も行いました。概念的には、スタジオとなった劇場が、周囲の世界から独立した1つの島という設定です。この切り離された場所で展開する物語を、観客は離れた場所にてスクリーンで鑑賞しているので、観客の反応が俳優に伝わるということはありません。観客と舞台との間の関係性が重要な演劇において、この試みは例外的と言えるでしょう。観客の反応が届かない、独立した島（スタジオ）からの情報は、着地点を見つけられないという点で、主題と合わせて見て論理的だと感じました。なので、意図的にこの手法を選択したということになります。

それでは作品NO72、1つ目のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

前半は始まりの部分、コンサートホールで俳優が観客と同じ場所にいますが、その後すぐにコートを羽織って劇場へと向かうシーンです。

後半は、あるエストニアの一家族の朝食風景です。お互い何も話さなくても感情はある、そのコントラストが印象的かと思います。

では、2番目のビデオに移ります。パーティーのシーンです。人々の食への執着を表現しています。それではご覧ください。



(ビデオ鑑賞タイム)

○エネリース パーティーの場面をご覧頂きました。友達や家族が集まった場面では、誰にいいことがあったか、誰に葬式があったかなどを話しています。

この場面でも皮肉なことに外見的にはとてもフォーマル、1人が大事な話をしているが、誰もスピーチを聞くことなく、食事に夢中になっている様を描いています。

このシーンは1つのカメラが食卓を回り、ロングショットで撮り続けていました。

■ NO34 Revolution 『革命』

次の作品NO34『革命』についてです。また異なった性質の作品です。

この作品はエストニア独立100周年の記念の年につくった作品です。タイトルは『革命』ですが、未来について描いています。主題としては、エストニア民族と自然環境との関わり、未来に向かって自然環境を取り戻す、というテーマです。

○通訳・読み上げ 自然環境、そこにおける人間の立場がテーマです。タイトルの『革命』は過去の歴史ではなく、これからの未来、革命の主導者はもしかして人間ではなくなるかもしれない、世界の変化を空想しています。

エネルギーとしての水、洗浄する水、キリスト教の考えでは紀元前に洪水が起こり全てを1から始めるよう、洗い流したともいわれています。水、という元素に注目したテーマを設定しています。シアターNO99の名前の由来の時もご説明しましたが、エストニアの言語学者ラリー、哲学者・詩人のハッソ・クリュルの現代叙事詩「メーテルとデメーテル（又はメルテルとデメルテル、デメーテルはギリシア神話の女神）」を用いています。叙事詩の中でメーテルは自分が全てにおいて尺を持っているという人物、デメーテルは物事の真相を掴むことのできる精神性を表しています。この叙事詩の中でも洪水の予兆が示されており、デメーテルの尺では理解することはできない、という記述があります。

本作の表現方法としては、状態とリズム、を上げたいと思います。俳優は稽古で何時間もかけてトルコのスーヒズム（sufism）の回転による瞑想を体現します。作品はこの場面から始まるのですが、入場してくる観客の関心を集めるため、開演20分前からこの場面が始まります。



次の場面は身体のバランスが狂っているにも拘らず、ダ・ヴィンチの橋の建立を試みる人間の場面です。ダ・ヴィンチの橋は釘や接着剤を一切使わないで建てる木製の橋のことです。バランスが狂っている人間がどの様に橋を立てられるかという難しさがありました。自然災害を扱い、水、風、大地との直接的なつながりを探求していた



ので、稽古をエストニアの原始的な自然の残る島で行いました。都市と切り離された自然の中の島は、雑音が無く、稽古に集中できる環境と考えられるでしょう。

それでは1つ目のビデオ、島での稽古の様子、『レボリューション #1』をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

ビデオは実際の上演の最初の部分でした。

○**通訳・読み上げ** 作品で重要な「リズム」について。シグナルとして原始的なコミュニケーション手段として、秘密の約束、または暗号としてのリズムという役割を持っています。作品の冒頭で俳優はハンマーでリズムを刻み続けます。韻を踏んだ台詞を使用しているので、リズムを取るということが効果的になっています。手法としてのリズムをビデオでご覧頂きましょう。順序が前後しました。3番目のビデオ『レボリューション #3』をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○**エネリース** 今日はこれまで、私たちの作品のうち4作品をご紹介しました。作品群のうち、わずか4作品ですが、どれもそれぞれに異なる手法を用いて、身体的表現、ビデオ、テクニカルな面からも様々なバラエティーがご覧になれたと思います。

○**ティート** 申し遅れましたが、私たちはこの3日間で私たちの作品について話します。一般的な4作品を先ず紹介しましたが、明日は、政治的アクションである『統一エストニア』について詳細に話していきます。そして明後日は、稽古の仕方について話したいと思います。

それではまた明日、お会いできるのを楽しみにしております。

○**山上** お疲れさまでした。ありがとうございます。

1つ質問よろしいでしょうか。横尾さんの通訳の中でNO99の表記を「ノー99」と読まれていましたが、それはエストニア語の読み方でしょうか。皆さん疑問に思われているのではないかと思います。

○**通訳** 講師に確認致します。（確認して）エストニア語でもナンバーという意味の省略はありますが、その場合NOではなく、NRになります。

○**山上** NOは意味のあるものとしてとらえますか、YES、NOのNOでしょうか。

○**通訳** 英語のノーでもなく、直接的にナンバーを表しているものでもありません。よって固有名詞として「ノー」と読んでいます。講師曰く、NOは英語のNOも当然連想されるわけですが、言葉として強い印象をもつ表記だということです。

■ 質疑応答

○**山上** この後Q&Aの時間を設けたいと思います。参加者の方でご質問のある方、ビデオをオンにしてご発言ください。

○**質問者1** 基本的なことをお伺いします。シアターNO99の15年間の平均的な年間予算と、エストニアの国家予算はどのくらいでしょうか。日本の国家予算はたしか250兆円位だと思ったのですが。

○**ティート** NO99の劇場年間予算としては100万ユーロだと思います。

○**山上** 100万ユーロは概算で1億3500万円くらいです。

○**ティート** 劇団のメンバーは俳優も含め50~60名おりました。国家予算は約1兆円程度かと思いますが、レートもありますので、正確には分かりかねます。国家予算のうち文化芸術予算が2%と言われますが、現実的には1.5%程となっています。

エストニアの平均的な月収は約10万円です。

○**質問者2** 今日紹介された作品は、最初の『ユビュ王』を除いて、かなり個別のテーマに基づいた作品だと思いますが、エストニアにはドイツやイギリスのようなリアリズム演劇はあまりないのか、ということと、エストニア人の文化、国民性の特徴について知りたいです。

○ティート エストニア演劇はずっとドイツとロシアの間にあるような演劇でした。100年ほど前、プロフェッショナルの演劇が始まったころにはやはりドイツの影響が強かったように思います。ソ連占領時代はソ連の影響が強かったです。1991年にソ連から独立するまではロシア系のスタニスラフスキーの流派が主流でした。独立後90年代はドイツの方へ傾倒していたと思います。

歴史的に見ると、東西ドイツ、また統合ドイツという時代の影響はエストニアにもあると思います。リアリズム演劇について言うと、エストニア国内の95%はいわゆるリアリズム演劇であると思います。

○質問者2 ありがとうございます。分かりやすかったです。

○山上 それでは時間ですので、パネリストの佐々波さんからひと言頂いて締めくりたいと思います。

○佐々波 ありがとうございます。作品の幅の広さに感銘を受けました。

感想ですが、まず、『ユビュ王』のチープな造形がより滑稽味を増しているという効果に感心しますし、年代を経てより造形から身体表現へと移っていく様にも感銘を受けました。かと思えば映像、というリアルな手段を用いていく点も興味深いです。また明日も楽しみにしております。

○山上 それでは時間になりましたので、今日はこれで。また明日もよろしくお願ひします。参加者の皆さまありがとうございました。どうぞ一度ビデオオンにしてご退出ください。

記録：山上 優

2021年10月29日（金）18：30～22：00（Zoom）

2日目

『統一エストニア』

シアターNO99の政治的プロジェクト『統一エストニア』とは。

○山上 今日テーマは、シアターNO99の『統一エストニア』についてのレクチャーとなります。後ほど質疑応答の時間も設けます。それでは宜しくお願い致します。

○ティート 皆様、こんばんは。今日も私たちの活動についてお話するのを楽しみにしております。

本日のテーマは私たちの活動史上もっとも政治的な代表作『統一エストニア』です。私たちの作品の中でもっとも影響力のある作品だと自負しています。このプロジェクトについてお話する前にシアター設立から本作までの道筋を少しお話したいと思えます。

■ シアターNO99設立後に困難な状況も

このプロジェクトは演劇のみならず多分野の視点が必要でしたので、興味深いこと、楽しいことだけでなく、たくさんの困難もありました。

2005年2月の活動開始以降、人気の低迷など、先行きが難しい状況もありました。昨日もお話ししましたが、私たちがシアターの芸術監督に就任した際、もともと劇場にいたスタッフを解雇する必要があり、感情的にとっても難しい局面がありました。その後次第に金銭的に余裕も出てきて、私たちの観点で俳優を選ぶこともできるようになりました。

シアター設立のコンセプトは社会的なテーマに取り組むことでしたが、突き詰めていくと、自分たちのクリエイションは政治的なものを扱うということが必然になりました。

ひとつずつ作品をつくる際に「主題」を設定して、最善を尽くしてきました。中心となる俳優陣に加え、テクニカル部門、制作部門も団員として扱ってきました。月並みな言い方にはなりますが、すべての人員を平等に扱うということは難しい問題でもありました。『ユビュ王』の制作は首都タリンから100キロほど離れた、廃墟と言わなければならない場所、水道、電気など何も無い場所だったので、技術的にも困難がありました。特にテクニカルの人々はこの困難な状況の中でも、興味深い創作に全力を尽くしたいという対応

でした。

設立当時から考えていたこととして、エストニア国外でもパフォーマンスをしたい、というビジョンがありました。ですが、旅費、運搬費などを考えると、自分たちの力だけでは出来ません。国外のフェスティバルなどから招致が必要でありました。

エストニアという国の地理的にも東欧の外れ、ロシアの隣という立地にも難点がありました。しかし設立後、3、4作品は国外で行うことに漕ぎつきました。主にヨーロッパ内ですが、国際的な演劇フェスティバルに参加することもできました。もちろん、国外にいくだけでなく、シアター内のモチベーションが大切なので、より広い観点を持つことが重要な課題となりました。

演劇に大切なのは資金、人、モチベーションとありますが、この3つを同時に持つことはとても難しいものです。劇団員への給料は高くはないのですが、関係性はとても良好なのでうまくいっていたようです。小さい劇団ではあるのですが、モチベーションが高く、関係性が良好でした。

■ 社会や政治のことを語る

もうひとつ重要だと思うことは、政治的側面、私たちの生活の周辺に位置するものです。そして観客は曖昧な対象ではなく、実際にそこで生活をする人々、そういう人々に社会のこと、政治のことを実際に語り掛けるようにしています。民主主義に関してですが、資源の観点で、NO93 “Nafta!” (2006年) という石油資源に関係する民主主義について題材を取った作品もあります。別の作品では人口問題も扱いました。エストニアでも出生率は低いですが、そのエストニアの社会的・政治的状況はグローバルなものであると考えます。

昨日お話した、『死んだウサギに絵を説明する方法』という作品では、経済産業とアートという相反する存在と社会的な立ち位置について考えました。これらの段階を経て、大衆主義、ポピュリズムに陥っている世界が見えてきました。

もちろんエストニアでも民主主義に基づいた政治が行われているわけですが、実際、トップで判断をする人々は限られていて、どこまで民主主義が本物であるかは未知数なところがあります。このような状況のなかで、話題性のある題材を取るとしたら、エストニアの人々に対して民主主義の重要性を教育する立場を取ることができるのではないかと考えました。

民主主義としてはエストニアは非常に若い国です。1991年に共和国としてソ連から独立した、民主主義の歴史は浅い国です。その中で、すぐに良い政治家が揃うとは思いませんが、将来へ向け国民の政治への期待感がありました。

そして2000年、新党結成があり、国民保守党ができ、国民からの期待も厚く、結成直後に国会にも入るといふ偉業を成し遂げました。2000年に国会に入り、それから10年間は活動があったのですが、だんだんと周辺においやられ消えていくような政党でした。しかしながら、急進的な活動、人気はエストニアの国民の記憶に残る政党でした。

そして2010年あたりにまた新しい政党が活躍をみせるのではないかという期待が国民の間で膨らんでいきました。ただ、問題だったのは、2008年に経済的ショックがあり、エストニア国内で新党を結成する資金がなかったことです。

■ 架空の政治プロジェクト

そのときに新党結成に躍り出たのが私たちです。私たちは国営レパートリーシアターでしたので、国家予算を使うことができます。と言いましても、そこまでの資金はないので、実際の政党を結成することは不可能です。

そこで、本物の政党を形成する代わりに、架空の政治プロジェクトを発起しました。タリンの、エストニア最大のアリーナ会場を借り、10年前に新党結成があったその場所で架空の党大会を開催することにしました。もちろん劇団でありますので、アートをつくるということは発表していたのですが、別の活動として新党を結成すると表明しました。

そのとき生まれたジレンマとして、実際は社会を欺くという点です。実際は演劇なのでアートなのではありますが、架空の政党なのか本物の新政党なのか、国民の意識はその間で揺れ動き、国民の大半は本当の政党だと信じるに至りました。

そのプロジェクトの最終着地点に党大会がありましたが、そのプロセスをドキュメンタリー映画として編集し、作品として完成させました。

そのドキュメンタリーを分割して少しずつお見せしたいと思いますが、注意点を申し上げます。この映画自体、プロジェクト自体、エストニアの当時の政界を反映して作られたものですので、その文脈を外しますと少し分かりにくいかもしれません。エネルギーが短いクリップにまとめているので、解説を交えて、その中心となる内容、エッセンスが伝わればと思います。

○エネルギー 繰り返しになりますが、このプロジェクトは国家予算が資金となっていますが、本物の政党をつくるには十分ではありませんでした。ですが架空の政党として、本物の政党であるという雰囲気を出すことに成功しました。

架空の政党ですが、リアリティを出すために事実に基づいた活動をしていくことになります。実際、リサーチしていくと、政党の活動には同じパターンがあります。例えば、ロゴを考える、公約を掲げる、また影響力のある文言というのは同じようなものになりがちです。さまざまな時代の、各政党の活動を調査したところ、時代に左右されず、どの政党も同じことをしているという印象を受けました。

もちろん私たちは劇団なので劇場でやることも可能なのですが、新党結成という観衆の期待に応えるべく、よく政党の記者会見が行われている、首都タリンのラディソンホテルで記者会見を行いました。

これから少しずつ見ていただきますが、ドキュメンタリー映画ですので時系列が前後します。作品のタイトルは『ほこりはどこから発生して、お金はどこへ消えていくのか?』エストニアのことわざからきています。実際のところ、気付かないところで起こっていて、真実は意識しないうちに起きているという意味になります。

○通訳 内容については通訳から解説致します。映画のタイトルは英語で、“Ash and Money”です。見て頂くビデオのタイトルは“A&M”となっています。

1つ目のビデオの内容です。シアターNO99の劇団員である、リスト・キュバルによる導入部分です。

「エストニアの有権者は政治に関心が無い、そして表面的なことしか見えていない、だからもし15秒の選挙広告をテレビで見たら、第一印象でどの候補に投票するか決めてしまう。

政治家の印象的な外見、例えば立派なヒゲ、きれいな髪型、などに着目してしまう。エストニアの社会民主党のように古い靴を履いている政党と新しいピカピカの靴を履いた政党と比較したら、当然新しい靴の方に投票してしまう。

エストニアで国会議員になる条件とは、21歳以上であること。

21歳の誕生日おめでとう。今から、カジノにも国会にも行かれます」

俳優の説明の後、画面に文字が現われます。

2010年3月24日、シアターNO99はエストニアの首都タリン、ラディソンホテルに於いて記者会見を行いました。記者会見では「統一エストニア」の構想についての方法論、キャンペーン、選挙活動について話します。そのすべての活動は、エストニアの既存の政党のマイナスな部分、大衆主義に反するというものです。

その記者会見から44日間、同じくタリンにありますアリーナで党大会を開催するまで国民は、本物の政党であるのか、もしくは、架空の、演劇という概念で見るのかその間で揺れ動いています。選挙広告、政治活動、エストニア民主主義史上巨大なキャンペーンを行うことになります。



2010年5月7日エストニア最大のサク・アリーナにて党大会が行われます。観客は約7,500人、多くの国民の支持を得ることとなります。

そのとき流れるBGMについて解説します。「我らは地上のどの教会よりも高いポジションにいる。人の神の宮殿にいます。あなた方に今見えてはいないでしょうが、聞こえているでしょう。声を聴いて従ってきた。私たちは団結するのです」

それでは“A&M #1”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

■ 「統一エストニア」の選挙活動

○エネリース 映画の導入部分を見て頂きました。繰り返しますが、私たちの架空の政党の政治活動において私たちが使用したのは、既存の政党が実際に使った用語です。

政党名「統一エストニア」は様々な意味を示唆するものであります。統一、すべてのエストニア人は平等であること、同じ理想を求め、団結すること、を意味します。また、ロシアにあります、「統一ロシア」という政党名の引用、皮肉でもあります。(エストニアにとっては友好な政党ではないという意味で) 統一エストニアは政府にとって現政権と良好な関係の政党ではないですが、エストニアの既存の政党が、統一ロシアと何かしらの関係があるという情報が当時少しずつ入っていました。

これから選挙活動における私たちの手法をお話しします。その1つとして選挙広告があります。選挙広告の特徴としては、各政党の党首の良い面だけを強調して見せるということです。政治家がメディアで話すときは、カメラの正面に立って重要人物であるかのように振る舞い、良い面だけを見せようとするのです。こちら、はじめの広告の内容としてお話しするのは、政党、統一エストニアの公約です。ほかの党と同じように国民との約束として綺麗事を並べています。その様子を皮肉った内容です。

それでは2番目のビデオについて通訳から解説します。

○通訳・読み上げ 選挙広告は既存の政党に倣ったものを使用しております。選挙広告は特別な資金を使うことなく作ることができました。もちろん既存の政党は潤沢な資金があるでしょうが、私たちは劇団ですので異なります。

お金のない反面、私たちはアイデア、鋭い意見を持ち合わせており、劇団の俳優、カメラ、技術的な基盤があります。ご存知のようにテレビコマーシャルというのは多額の資金が必要となります。

私たちの場合はテレビニュース番組や政治番組がこのプロジェクトを宣伝する形になりました。プロジェクトが注目され、また政界へのアートの介入として挑発と受け取られ、テレビがゴールデンタイムに招いてくれたことで自己負担のない宣伝をすることが出来ました。

内容についてです。ティートが乗馬をしながら話します。「エストニアの皆さん、あなた達はこれまで改革党、中央党、社民党、国民保守党を選んできました。エストニアの生活をより良く改善すると言ってきた政党たちです。実際には変化したでしょうか。皆さんもうお分かりでしょう。皆さんの期待に応えられるのは、私たち『統一エストニア』のみなのです」

次の場面は文言が表示されます。乗馬、に掛けたことわざで、不自然なほど急にお金持ちになること、を表しています。それでは“A&M #2”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

次の場面はプロジェクトの前、ティートが活動について話している場面になります。ティートが、夏にサマーハウスでプロジェクトについて話している場面です。

「このプロジェクトを通して社会における重要な転換期を体感してきました。政治家が日々横柄になっていく様子、政治は本当に難しい、という顔をするようになっていきます。首を突っ込むんじゃない、近づくな、政治は難しいのだから、と言っているようです。このような政治家に腹が立ちます。

親愛なる政治家の皆さん、私だって同じように知能を持ち合わせていますし、私よりも頭の良い友人知人もたくさんいます。その横柄な態度には我慢がならない、それはただ政治家が嘘をつくという証明にしかならない。政治的な転換期であることは、私だけでなく誰もが気付いていました。私たちの劇団にたいする世間の反応は、政治家の予想よりもはるかに大きかったのかもしれない」

それでは“A&M #3”のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

先ほどビデオの後半部分の解説をし忘れてしまいました。前半ティートの話のあと、後半俳優たちが「統一エストニア」の政党スローガンを声高に叫んでいます。「エストニアのために」と愛国主義を表しています。次の場面は劇場での打ち合わせの場面、ティートが話します。

「エストニアの社会はどんどん閉鎖的になっています。

政党に属している政治家が国会で法律を決めます。ですが国会にいる人間は一部の代表者でしかありません。政党に属しているのは4万人だが、実際に活動しているのは各政党100人程度です。ですから権力を掌握している人々はごく少数です。

政党内のいわゆるエリートのみが実権を持っている、政党内で権力を持っているのは1人または最大3,4人です。従ってエストニア内で、15人から20人が権力を持っているということになります。

その現実に対抗したいと考え、議会の開催をします。エストニア最大のサク・アリーナをそのために借りることにしました。このプロジェクトの準備のために政界の有識者と話し合い、インタビューを重ね、この事実を公表します」

■ 「統一エストニア」の党首としての活動

○エネリース 次、4番目のビデオは、選挙広告に関するものです。政党が人気を博していく際、国民との約束はどのようなものにしたらいいのかという内容です。そのひとつ大事な要素となるのが、銀行のトップと話したときに言われたことがあります。「政治家として国民の人気を得たいなら、銀行のローンを帳消しにすればいい」というものです。もちろんローンを利用するならばお金は返さなければならないのは事実です。2008年に経済的ショックを受けたエストニアですが、ローンによってさまざま

なものが手に入るという味を覚えてしまったところでした。

結果的に統一エストニアのスローガンとしたのは、「銀行は不平等なローンへの責任を取るべきである」というものです。もちろんこれは、実現性のないスローガンなのですが、そのスローガンを載せた大きなポスターを、エストニア最大手の銀行の建物の向かいに貼りました。銀行の職員は窓からその広告を見てショックを受けます。その影響は大きいものでした。

○ティート 当時、エストニア最大のその銀行はスウェーデン資本でしたので、職員はそのことをスウェーデンの銀行のトップに電話で報告します。

○エネリース もう1つの広告手段として、テレビコマーシャルを使用しました。若く美しい母親がローンを組んで家を建てるというものです。母親の周りに子供たちがいて、新党、統一エストニアの党員が解説をします。

エストニアの政治広告では最後に国民の統計データを出すことがあります。わたしたちもそれに倣い、エストニア国民の72%が銀行はローンの基準を改定するべきだと考えているという統計データを表示しました。この数字72%は実際の統計に基づいたものではなく、統計も行われていません。数字だけ広告に載せるということは簡単なことでした。

それでは、4番目のビデオをご覧くださいませう。

(ビデオ鑑賞タイム)

○エネリース 次のビデオは記者会見の様子です。よく記者会見が行われるタリン市のホテルに沢山の報道陣が招待されました。予め、国家規模の重大な要件を伝える記者会見だと予告しました。数か月にわたり、政界の有識者と話し合いインタビューを重ねたと公表しました。

この記者会見から1ヶ月半は架空の政党ですが、政治活動を行うと宣言しました。活動としては既存の政党が行う手法を同じように真似ることになります。それは予想外に効果的でした。元々は劇団だが、本当の政党だと人々は信じ始めます。

その結果として、私たちは記者会見後1ヶ月半の間、たくさんのメディアから取材を受けるようになります。芸術家としてこのような活動ができるのはとても興味深いものでした。1ヶ月半、私たちは架空の新党として活動することになります。プロジェクトの手段としてテレビ、街頭広告を用い、私たちの活動についての討論の場が持たれました。ビデオの中でティートが次のような発言をします。

「今のエストニアの政治はとても悪い状況にある。毎日、国会で質の悪い演劇をみる代わりに、私たちには質の良い政治ができるのではないか」

それでは5番目のビデオ“A&M #5”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○エネリース ビデオの後半で、ティートが運転している場面があります。BGMではこの政党が本物の政党なのか架空の政党なのかと、実際のラジオが流れています。

ここまでは「統一エストニア」の党首としてティートが話していましたが、次の広告では、若く逞しい男性党員が映し出されます。スローガンは既存のもの引用です、1930年代ドイツで言われていた、美しい人たち、たくましい人たちが人気を得て政界でも活躍するというものです。ドイツでのヒットラーの登場や政治的混乱は良いものではなかったと思いますが、政界で、美しい、たくましい人たち、外見的な要因が人気を得るという考え方は今も根強く残っています。

ビデオの中で、会話があります。平均月収が高くなり、生活の改善が公約として提示されました。もちろんそれは達成されることはなく、空虚なスローガンとなります。人物の外見の美しさを強調するような広告となっていて、若く逞しい人が光輝く権力を象徴するような背景に立っています。作業服をスーツに着替え、これから働くという意味を込めたスローガンになっています。

それでは6番目のビデオ“A&M #6”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○エネリース こちらはコミカルなシーンになりますが、私たちの事務所内で、ティート、エネリースとドラマトゥルクの3人で人を操ることの簡単さについて話しています。これまで生活している中では、このような政界の要素について気付くことはなかったのですが、このプロジェクトを通して知ることとなりました。このプロジェクトを通して、私たちも実際、人々を操る為政者としての立場に立っていたと分かりました。政界のトップで語られていることは、真実ではないのだ、と感じています。

このプロジェクトを通して、これまで信じていたこと、リアリズムが崩壊していくような気がしました。約束されたこともどんどん現実とかけ離れていくその現実を目の当たりにしました。人間の性質はそう簡単にかわらないので、さまざまな手段で人々が操られるということは時代を超えた普遍的なものだと考えます。

実際の演説に使われている方法を俳優が実際に学んでいくのですが、このような慣習を学ぶのはなかなか苦勞しました。もちろん私たちの俳優はスキルが高いわけではあります、台本として中身の無い言葉を喋るとするのは、大変でした。

私たちふたりも統一エストニアの党首として生活していくわけですが。そして着地点であった5月7日の党大会では、実際の政治家のような専門的な言葉遣いができるよう学んでいくわけでありませう。

わたしたちは普通の人間ですが、数ヶ月間政界に関わったことで、政治に対して、ただの一国民として考えることが難しくなったということです。

それでは前半を終了します。ありがとうございました。後半を楽しみにしております。

<休憩>

○**山上** 後半に入る前に3点確認しておきたいことがあります。質問致します。

1. 政治的プロジェクト『統一エストニア』の話をしていただいています、HPに作品ナンバー75と掲載されていますが、NO75という作品という理解でよろしいでしょうか。

○**回答** 作品番号75番、NO75は最終的に党大会ですが、プロジェクト全体としてはそれ以外に3つほど『統一エストニア』に関連する小作品があります。

NO76.8『200人が6500人になったならば』劇場から出て人々をどの様に操ることができるのか、劇団としての試み。

NO76.6は『見るよりも一緒にやる方が面白い』というタイトルで、市街地でのフラッシュモブです。

NO76『タリン、私たちの市』観光ツアーと同じような形式でタリン旧市街を政治的観点から巡るツアー。

以上、3月の記者会見から44日間にわたるプロセス全体が『統一エストニア』ともいえます。

○山上

2. 急にお金持ちになる、比喻で馬に乗るシーンがありました。「DIVING To RICH」と出ていましたが、エストニア語でどのような表現になるのかももう少し詳しく教えてください。

○回答 ことわざですが、意識すると「急いで金持ちになる」です。エストニア語では乗馬してお金持ちになるということで、「乗馬」が「急いで」という動詞と類似し、言葉遊びになっています。一瞬にしてお金持ちになるということは不可能なこと、と言えるでしょう。同じように不可能なこととして、公約に、大仰なきれいごとを並べても、実際には実現不可能だという政界への皮肉の意味となります。

○山上

3. 俳優がスーツから作業着に着替えるシーンがありました。この部分の解説もお願いします。

○回答 スーツから労働者の作業服に着替えるのは、軍隊の比喻でもあり、スーツをきて事務的な仕事をするところから、着替えて実際に肉体労働をするという、発想の転換の必要性を皮肉っているということになります。

○山上 ありがとうございます。それでは後半よろしくお願いたします。

■ 演劇の枠から出ることの重要性

○エネリース 先ほどの質問に対して、1つ1つの作品が政治的プロジェクトとお答えしましたが、本質的な命題として「政治的な演劇、芸術とは何か」ということがあると思います。

これまでの経験から分かることですが、主にヨーロッパにおいて、普通の舞台に俳優が登場して、政治的なテーマがあったとしても、形式としては典型的な演劇の枠から出ないものになっています。内容は興味深いものであっても、演劇の形式としてはつまらないと感じることがあります。

それらと対比して、私たちは、演劇というフレームから抜け出し、その一歩先にある、より興味をもってもらえるような新しい試みをしました。

私たちが架空の政党を演じたことで、自分たちが目にするものが、何が現実で、何がイリュージョンなのか、その判断の難しさ、という点に着目していただければと思います。

現在の現実社会の中で、「現実」は簡単に定義することができます。ニュースで報道される、新聞に記事が載るという単純なことで、本当ではないことが事実として捉えられてしまうことが往々にしてある。

(劇団が架空政党を演じたことは)世間的にはショックなことだと容易に想像できますが、俳優が台詞をいうこと、影響力のある発言をするパフォーマンスは俳優の専門性から、それ程難しいことではありません。劇団として俳優として、普段から使用しているスキルを応用して政治活動ができたので、自分たちの能力を適用するという活動になりました。

次、8番目のビデオについて解説します。このビデオは政治的操作、の例となります。選挙広告のポスターを落書きで汚すシーンです。事実に基づいたものでしたが、対立する政党の存在を示唆するものとして、実際には自分たちで行なったアクションです。

このように意図的に対立する政党のポスターを汚す行為はエストニア内で実際に起きた出来事です。エストニア中央党がエストニア改革党のポスターに落書きをした事実がありました。私たちの架空政党のポスターは、タリン市の中心地にありましたので、落書きをするには、真夜中に行く必要がありました。

俳優たちは日中このプロジェクトの間、スーツ姿のフォーマルな格好ですが、夜中には黒い帽子、作業服に着替え、また別の役割を担いました。対立する政党の存在を示唆するという役割は重要でした。

○ティート このプロジェクトを始めるにあたり、多くの政界の有識者からインタビューを受けましたが、政党のポスターが汚されたということで、有識者からの多くの助言をもらうことになります。

エストニアの慣例として、1週間のニュースが週末にまとめられて流されますが、週末にまとめられたニュースが翌週も流れるということは話題性の大きさを物語っています。エストニアに新党結成というニュースが流れた翌週も、新しいニュースが出てきてその中に紛れてしまうので、1ヶ月半の活動の中で、何か急進的なことをして更に新しい話題性のあることでニュースに上り、人々の関心を引き付けるためにこのアクションが行われました。

重要なのは、メディア、報道陣が私たちの実際の活動やメッセージ性に反して、メディアがどの様にそれを受け取り、私たちの仲介なしに、国民に何を伝えていくのか、という点に着目したということです。

○**エネリース** メディアに関してですが、この落書き事件のあと、エストニア最大の日刊紙の編集長が私たちの劇場にインタビューにやって来ました。

私たちの劇団員はインタビューを受けることは大きなリスクがあると思いました。私たちが架空で行なっているということが露わになってしまうのではないかと思われたからです。そうするとそのプロジェクトがその先へ進まなくなるという恐れがありました。インタビューを受けない方がいいという助言もありましたが、私たちは結局インタビューを受けることになりました。プロジェクト開始からある程度の時間が経っていて、私たちは嘘をつくのにも長けていましたので、インタビューでも真実を交えながら周辺を迂回するような話し方で切り抜けました。

そのインタビューの中でとても興味深い場面があります。新聞の編集長から、なぜ新聞の文化面にのるような私たちアーティストが政治に介入しなくてはならないのか？ 重要かつ真面目な政界に介入するのは良くないことだという糾弾をうけました。

その質問に続き、ポスターの落書きについても質問を受けました。その質問は、ポスターの落書きはあなたたちがやったのですか？ という直接的なものでしたが、質問への回答として、「このアイデアは私たちのアイデアではない」という答え方をしました。もちろんそれは真実ですが、真っ当に答えているわけではありません。

すると編集長はその答えを、私たちがやったわけではない、と受け取ります。この答え方にはニュアンスがありまして、私たちが実際にポスターを汚したのですが、「ポスターを汚す」というアイデアは私たちのものではない、ということです。

私たちが犯人ではないと受け取った編集長はそのあとに、ニュース、新聞記事といったメディアの重要性について語ります。結果的に、私たちの写真が新聞の一面に大きく載り、政治面で様々な討論にのぼり話題となります。結果的に、このインタビューは私たちが本物の政治団体なのだと伝えることになりました。

それでは8番目のビデオ“A&M”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○**エネリース** これは、自分たちのポスターを落書きして汚すというシーンでした。

私たちの政治活動の一環として行った、ビデオ配信、選挙学校シリーズについてご紹介します。週1回インターネット上で動画を公開しました。劇団の俳優が、難しいと思われがちな政治の仕組みについて簡単な言葉で解説するという内容です。

○**通訳** 劇団の俳優によって簡単な言葉で語られます。全ての選挙において、政党のスローガンが掲げられる、重要なのは、どうやって選挙戦を勝ち抜くか、どうやって権力を手に入れるか。

その際に大切なのは、公約を出す際、簡単な言葉で誰にでもわかる言葉で伝えていくということです。たとえば「国のイニシアチブのもとに活動をする代わりに、企業の社会的責任を高めるべきだ」このような難しい言葉の長いスローガンではなく、簡単に分かりやすく、「たくさんお金がもらえます」と言った方が、伝わりやすく、メッセージ性が高いと考えられます。

ビデオでは、実際の政党のポスターを例に挙げます。エストニア改革党のポスター「裕福な国、より良い給料！」というスローガン、国民保守党のポスターには「より良い給料を全員へ！」と簡単なスローガンになっている、など。

それでは、この9番目のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○**エネリース** それでは、次のビデオに移りたいと思います。サク・アリーナでの党大会の様子となります。最初は準備の様子です。床には絨毯、天井には政党のマークが刷られた幕が吊られます。このアリーナはエストニア最大のもので収容人数は1万人。これまでの経験を踏まえ12のカメラを使い、メディアを招待し、ライブ配信も行いました。

この党大会は4時間にのぼるもので、その間にたくさんの皮肉を込めた内容が見られます。このアリーナでは1週間のリハーサルを行い、直前3日前のリハーサルでは実際のカメラも入れて行いました。

通常、党大会では、エンターテインメント性のある余興もあります。私たちは、エストニア国内の重要人物、VIP招待客へのインタビュー、ロックミュージックのコンサート、プロンドのダンサー達によるダンスパフォーマンスといった余興も提供しました。このVIPへのインタビューですが、当時の実際の各省庁の大臣、弁護士などが招待客として参加していたので、皮肉なことに、とても効果的でした。

アリーナには巨大スクリーンが設置され、7,500人の党大会の参加者全員が細部まで見ることができました。この7,500人の大会参加者の中には、事前に募集した私たちのパートナーである若い参加者もあり、状況に応じて様々な役割を担い、サクラとしてもサポートしてくれました。

それでは10番目のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○**エネリース** ご覧のように大きな会場にたくさんの観客が集まっておりました。それを複数のカメラが中継し、テレビでも放映されました。このたくさんの参加者は大きな期待をもって参加しているので、その期待を裏切らないよう色々な内容を提供し努力し

ました。

大会に先立って行ったたくさんの有識者とのインタビューをもとにして、大会では政界に影響力を持つ発言をすることができました。

選挙学校での話は政治に基づく話になったので、政界でも重要な人物として見なされるようになりました。この選挙学校ビデオの、実際の政治家、政党の手腕をあばく、という内容について政治家たちは、その情報が自分たちに不利益になると反発し私たちに伝えてきました。

このプロジェクトは10年前のものになりますが、ビデオに出ていて、党大会でマイクを持った俳優は、10年経った今でも、重要な人物として、政治の議論の機会にゲストとして呼ばれることがあります。党首を演じた私たちも政界から注目され、最近の地方選挙では私たちが誰に投票するのかという電話取材を受けたりします。

私たちは演劇関係者なので、実物の政治家が使うような手法、例えば高い所、壇上から話すというようなことは、注目を集めました。

これまでは演劇、劇団として文化・芸術面のジャンルと見なされてきたわけですが、このプロジェクト以降は、政界でも意見を表明する機会があります。

○通訳 次のビデオ、11番目のビデオについて私から解説します。

党大会の党首到着のシーンになります。劇団の俳優が次のような内容を話します。

「すべての党大会において一番大事なのは、ドラム演奏が鳴り、旗が振りかざされ、人々が手拍子で出迎える党首到着のシーンです。有権者のほとんどは、政党ではなく党首を選ぶという感覚です。それでは今がイベントの頂点となります、どうぞ」

このあと党首が入場します。次のビデオの最終シーンでは、ティートが次のように話します。プロジェクト終了後の振り返りです。

「エストニアの社会では、いつの日か新党が発足するのではないかと人々が期待していた、しかし当時は誰も新党立ち上げの資金はありませんでした。文化芸術分野の私たちがその役を買って出たのは、驚きと捉えられた」



それでは11番目のビデオをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○エネリース この鮮やかな登場シーンの次の内容は、役員、党首の選抜です。退屈な内容にならないように、参加者全員が党首、役員に立候補できるという参加型イベントを考えました。そう言うと、7,500人の参加者はショックを受けたようでした。今から本当に新党が結成される、その瞬間なのだと捉えられました。

その実際のやり方としては、会場にいる人々の座席番号にもとづいて、舞台の上でくじをひくというもので、そのくじで当たった人は役員になれるというイベント性の高いものです。参加者全員がチケットを探し、手にして、その不安と緊張の場面はとても美しいものでした。

公正な民主主義に基づいた抽選ですが、舞台上で抽選が始まると、当選者となるのはすでに「統一エストニア」の党員ばかりです。ここで参加者は、これは実際の新党大会ではなく、演劇、パフォーマンスであったことを理解します。

このようにすでに決定されている事項を今一度見せることは実際、政界でよくあることなのですが、エストニアからEU議会に参加しているVIP参加者の方が、「こんな事はやってはいけない。真の民主主義を追求すべきだ」と発言します。

私たち演劇関係者に対して舞台上に上がったのは、EU議会で高いポジションにいる実際の政治家で、観客がショックを受ける場面でした。そのEU議会の政治家が登壇すると、党首の選抜では対抗する人物をもう1人、エストニアの弁護士・裁判官でもある人物を立てるようにします。このティートの対抗候補者は、エストニアの党首へと人々が長年夢見て来た人物でした。

党首選抜には、会場にいる参加者全員が電話でSMSを送るという投票が行われました。演劇界からティート、一方、人々が長年望んできた政界、社会的に影響のある人



物。電話投票で、実際に投票できるシステムです。

もちろんこれは、私たちのプロジェクトの一環でしたので、さくらの票を集めてティートが党首に選ばれます。

次は、40分のビデオ“Ash&Money”の29分目から終わりまでをご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○エネリース ティートは党首として党大会をどの様に締めくくするか、長期間にわたって考えました。メッセージとしては、簡単に人を信じず、自分の頭で考え、自分で物事を判断してほしいということです。

最終シーンではスクリーンに、「あなたたちは自由です」というメッセージが表示されます。党大会は終わったので、あなたはもう家に帰っていいですよという意味と、人間としてあなたは社会の中で、政治的コンテキストのなかにおいて自由です、という意味が込められています。

映像を細切れに見て頂きましたが、実際のドキュメントは1時間40分の内容となります。フルバージョンの映像のURLもシェアします。質問等ございましたら是非どうぞ。



■ 質疑応答

○柏木 参加者のみなさん、ご質問等ございましたらお顔を出してお願いします。

○質問者1 とても興味深く拝見いたしました。俳優です。ヨーロッパでは、アートと政治や社会に対してのメッセージが日本より密接に、直接、表現と繋がっていて、ダイレクトに社会に対してのメッセージが表現されていると思いますが、それでも敢えてヨーロッパでのアートというものは、社会活動、政治活動とは全く別に、アートとしての区分けがどのように捉えられているか教えてください。

政治的な活動もしているがアーティストであるという区切りは何でしょうか。映像はとても興味深かったので、エンタメにしている、ということでしょうか。

○エネリース 区切りというのは、実は曖昧なもので、文化芸術のサイドからいうと、事実に基づくものなのか、本当に真実なのか、そこに本来の区切りがあると思います。ただ、はっきりと線引きできるものではないと考えています。

○ティート 実際の政治活動家（アクティビスト）との違いは、彼らには実際目標地点があって、そこに向かって突き進んでいくのだと思います。一方でアートの側からいいますと、私たちは疑問の提示、質問を投げかけます。その答えを人々が考える、それを目的として活動しています。

このプロジェクト終了後に政治との関わりができ、いろいろオファーもあったのですが、プロジェクトの後は、私たちの培ってきたスキルを政治界に適応していくことは拒否するという立場をとってきました。

○質問者2 2つ質問があります。シアターNO99は国営でしたよね？ このような政治的な活動をした時に、国家権力側からの制限はなかったのでしょうか？ それは気にしなくていいのでしょうか？

2つめは、日本では今まさに選挙期間中ですが、選挙に対する見方がひっくり返ったような気がしました。2つめは感想でした。

○ティート もちろん国がプロジェクトの内容をチェックはしているのですが、エストニアの観点でいうと、民主主義的に、個人の表現の自由という観点からこのプロジェクトを進めることができました。

既存の实在の政党の直接批判は避けていたので、一般的な政党の印象というところにとどまり、直接的な批判はしておりません。2面性がありまして、実際の政界で活動すること、その反面は架空のものである、文化芸術のプロジェクトであるという言い訳が通るというようになっています。

他の国でも同じ現象が見られると思うのですが、ニュース、新聞記事の一面で大々的にスキャンダルを報じられると人々の注目を集められるのでそれも手段として活用しました。

架空の政党ではありましたが、メディアにとってはスキャンダル、大きな関心の対象になったので、個人の資金を使わずテレビのゴールデンタイムで広告を打つということにもつながったので、大きな効果があったと思います。

ただプロジェクトにはお金が掛かる訳なので、途中で国からチェックが入りました。予算がどこから出ているかというものです。

私たちの予算を公開して、賄賂等がないことを明かした上で自分たちの収益で活動していることを伝えました。そのキャンペーンを実施する上で、印刷代とささやかな予算

でしたので、自分たちで賄うことができました。

○佐々波 ありがとうございます。芸術家として非常に興味深かったです。フェイクをリアルにするということ、規模が大きいから人々が信じていくことに興味深さを感じました。次はなにをしようという新しいプロジェクトがいつも頭の中に浮かんでいるのでしょうか？

○ティート もちろん頭の中にはアイデアがたくさんあるのですが、「統一エストニア」のような巨大プロジェクトがいつもできるわけではありません。

○エネリース いつもシアターNO99だけで活動しているわけではありません。国外の活動もあるので、その際は現地の人材や、コンテキストに合わせて作品を創っています。

この政治的プロジェクトの後は、フランスのコメディ、また違ったコンセプトで攻めていくという考えです。

○柏木 では、本日はここまでにしたいと思います。

2021年10月30日（土）18：30～22：00（Zoom）

3日目

物語からではなくテーマ（主題）に基づく 作品の作り方

シアターNO99の稽古（リハーサルメソッド）・
最終目的としてのartistic images・芸術的表象。

○ティート 昨日のセミナー2日目には『統一エストニア』政治的プロジェクトについて詳しくお話ししました。こちらの作品は私たちの作品のなかでもマスターピースと呼べるものになっております。

3日目の本日は、私たちがこれまでつくってきた作品の中でも最も自信のあるものについてお話ししたいと思います。2005年の設立以来、国外に出ていくということを目標の1つにしていました。その際、シアターNO99の舞台を観ることで「これは私たちの作品である」とわかるような特徴を示唆していきたいと考えました。

51

■ NO43 Filth 『屑』

本日は、NO43 Filth、日本語タイトル『屑』についてお話しいたします。

こちらの作品ですが、元の素材としては フォードル・ソログープ、というロシアの作家の『小悪魔』という作品です。この作品は日本語でも3度ほど翻訳されていますので、ご興味がある方は読んでみてください。

この小説は主題にロシア語の表現「ポシュロスト（пошлость）」、という概念があります。こちらは翻訳できない言葉、表現とされています。あえて日本語で訳しますと、「泥にまみれた感じ」そして「意地悪さと陳腐な自己満足の凡庸性」を表現しています。

この作品の主人公ペレドーフは俗物なので彼の行動についてが焦点となっています。この小説全体としては主人公がモラルに反して行動してしまう俗物で、狂っていく様子が描かれています。

具体的に内容を説明すると、主人公はロシアの片田舎で学校の教師をしています。彼は、よい教師ではなく、生徒が学校の教室の角で跪いている様子に性的な興奮を得るといふ嗜好があり、生徒をいじめることを趣味にしています。また、主人公が引っ越し度に、以前住んでいた家を破壊するということを繰り返しています。これらの表現から彼の世界、宇宙の嫌悪感を表しています。

このような牽制に基づいて、人物自体が空想のようなもので、どれも冗談のような面白おかしい登場人物のように感じます。

本日は、この小説に基づいての1シーンに注目して、演劇において1つのシーンが出来上がっていくプロセスを描いていきたいと思います。この主人公は、学校の教師であることから社会的に高い地位であると見なされます。そのため、小さな片田舎でお見合いをさせられていました。主人公が友達の家で同時に3人の姉妹とお見合いをするところから始まります。はじめは1人ずつ見極めて選ぶプロセスがあるのですが、結果的に、誰も選ばないということになります。

それでは、NO43『屑』という作品の稽古をご覧いただきたいと思います。ここでは言葉もでてきますが、稽古のプロセスなので理解には問題はないと思います。長いビデオになりますが、6つの場面によって構成されています。

最初のシーンでは1つの動きを1時間以上繰り返すことにより、身体的限界に近づく、そして、限界の向こう側にある実存を探るといふものになります。この課題のなかで着目していただきたいのは、毎回すぐに新しい動作、表現に移るのではなく、1つの決まった動作だけを繰り返すことによって、その先に新しい動作の発見があるといふものです。

2つ目のシーンでは、俳優たちが足踏みをしながらシーンを組み立てていきます。これは即興なのですが、この足踏みのリズムが何があっても即興の多い舞台における表現の確かな軸となっています。

3つ目のシーンは稽古ですが、具体的なシーンの即興です。先ほど紹介した小説に基づいています。主人公が三姉妹のところにお見合いに行くシーンになります。具体的に表現するといふよりは、新しい表現を発見するといふものになっています。

4つ目のシーンは稽古場に泥、すなわち象徴的な屑が運び込まれて、その中で稽古する様子を描いています。

5つ目のシーンは、演劇作品の中で実際に使う場面の稽古です。しかし、小説を素材としながら、その具体的な表現というより、稽古のプロセス全体で見つけた自分たちの表現を表すことにフォーカスしています。

6つ目のシーンはある程度決められたシーンなのですが、その中でもう一度、即興性、元にあるイメージに立ち返って身体性を発見するというものです。こちらは、身体の実存性を探すということで、一人一人の内なるモンスターを解放すること、リズムを取ることを、記号性を主題としています。

このビデオは少し長く、6つのシーンの間に黒みがでますが、すぐに次のシーンが出てきますので、驚かずにご覧ください。

ビデオ名はNO43 “Filth Rehearsals” と書いてあります。

(ビデオ鑑賞タイム)

これらは稽古場でのシーンでした。シアターNO99として活動を始めてから、主題の根底には常に社会的に政治的に、現在の問題を扱うことを目的のひとつとして考えてきました。話題性のある政治的、社会的な問題を扱う際には、問題について書かれた記事はまだ出版されていませんので、自分たちで思想から組み立てていく必要があります。

例えば、シアターNO99のプロジェクト『統一エストニア』でも同じように、自分たちで組み立てていくプロセスで、台本を別に用意する必要がある。というわけで即興、インプロビゼーションは稽古のプロセスにおいて大きな意味をもつものです。インプロ、即興において重要なのは何を目的にしているのか、どこに着地点があるかということです。

一般的には演劇において、何らかの物語性が創造されることが多いのではないのでしょうか。

そのような状況で、社会的な問題を扱う際にも、私たち自身の周辺の事柄なので、物語性と枠組みを決定する必要はなく、その事実を語ることでストーリー（物語）となるのです。

私たちにとって演劇が不完全であることと、全てを語ることに直接的な関係はなく、作品制作の際に全てを語ることによってその不完全さを解決出来るものではありません。

演劇の欠陥を鑑みて、私たちは物語性に頼るのではなく、実際の実存性によって欠陥をカバーできるのではないかと考えています。その全体を指して、私たちはアーティスティックイメージと呼んでいます。

長年、説明しようとしていますが、その言葉も不完全なものなので、完全に説明することは難しいのです。

フランスの哲学者ガストン・バシュラール（Gaston Bachelard）がアーティスティックイメージを分析しています。彼によると、3段階あり、まず精神的な部分、精神分析の部分、そしてイメージに繋がっています。

このアーティスティックイメージ（芸術的表象）は精神的心理的な部分が大事になっています。

私たちのシアターNO99の作品のみならず、演劇に関わる時は常にこのアーティスティックイメージを大切にしています。

よく演劇においては筋書きが大きな意味を持つと言われますが、私たちにとってはむしろ筋書きは邪魔になってしまうことがあります。長くて美しい物語を語る筋書きよりも、たった1つの決まった刺激をもとにつくることで、真実に迫ったものになると信じています。

本作品に関しては、ソログループの作品『小悪魔』に基づいて、その小説内のいろいろなシーンを試して稽古で使っています。しかし、稽古のプロセスの間に別々の何シーンよりも1つのシーンに集中した方が言いたいことを伝えやすいことが分かってきました。

小説を素材としていますが、「泥」について話すとなると、ひとつのシーンに集中して人間の共存の難しさ、その苦痛を描くのに1つのシーンで十分だと思いました。

しかしながら、素材の小説は大事な意味をもっていて、この素材なくしては我々のイメージに到達することは難しかったと認識しています。

稽古のプロセスや、舞台上の作品の中から見えてくるかと思いますが、男女間の力の不平等さ、自分たちでは考えつかなかった部分は小説に頼った部分です。

それではこれから、実際の作品の映像をお見せしたいと思います。作品の時系列通りにお見せしたいと思います。最初は導入部分です。泥との戯れのなかで、人間の身体性について考える場面です。

実は、こちらは幕開きから数十分続いていたものです。ご覧になるのは、その最後の部分になります。舞台上にいる人間は、博物館や美術館、オフィスに閉じ込められた人々、人間の共生は苦痛を伴うものだという象徴です。

では、NO43 “Filtch Performance #1” です。



(ビデオ鑑賞タイム)

このビデオからエッセンスが伝わっていただきたいと思います。表面上と深層の美しさに注目して頂けたらと思います。稽古の様子をご覧いただいたのは、極限までの身体性が舞台上

でも同じように表現できるからです。主人公が三姉妹との関わりの中で見られるように、極限に挑むまでの身体性が見られます。

本作品の主人公は小説の中でも主人公ですが、その役を演じた俳優はラスムス・カリユナルヴと言います。ラスムスは「これほどまで身体性も高く、チャレンジしなければならない役を最後まで演じられたのは仲間の結束力とサポートがあったから」と言っています。

この場面は長く長く、不自然にも長く、そんな中でも演じきれたのはラスムスのみならず、全員の俳優にとって仲間の存在があります。

それでは次の映像を見ていただきます。男性が女性を選ぶという状況から反転して、女性が男性を選ぶシーンになります。“Filth Performance #4”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

このシーンでは、俳優たちの関係性を示すのではなく、もっと深いところに注目しています。俳優ひとりひとりが演じる上で、台詞の裏側にあるものを伝えるという意味です。この作品についていえることは、俳優たちはひとりひとり人間であり、人間として舞台上に存在します。

今、ヨーロッパの演劇界ではあまりよくない傾向が見られます。舞台上で俳優が台詞を話す際、その俳優が舞台上で信じていることしか言えないという傾向です。言語的にも直接的な意味です。

このような傾向にある俳優たちはシェイクスピアの『ハムレット』や『リチャードⅢ世』を演じる上でも、自分のモラルに合わないことは、役であっても受け付けることができないという思い込みがあります。これは決して誇張ではなく、ヨーロッパのシアターで目にしてきたことです。

私たちのシアターNO99の劇団員にもいえますが、自分の意見と反対のものだとして

も、あえてその同意できない方法を用いることで最終的に自分の主張と同じ着地点にいたると思います。このことがいえるのは、統一エストニアのプロジェクトで、賛成できない政治的手法（政治家のいやな発言や政治的社会的行動）をあえて自分たちで用いることによって、最終的にそれらに反対であるという意志の表明をします。

では、休憩後にもう1つビデオをお見せします。そのあと質疑応答の時間を設けます。どうぞたくさん質問してください。

<休憩>

○**山上** 時間になりましたので、再開します。ここで一旦質疑応答に入りたいと思います。それでは、ご質問のある方、発言されたい方は画面をオンにして合図を送ってください。

■ 質疑応答

○**質問者1** とても素晴らしい表現、ありがとうございます。2つ質問させてください。身体表現で怒りの表現をする際に、なにか考えていることはありますか？

○**ティート** ご質問ありがとうございます。怒りの身体表現においては、すぐにお答え出来ません。それは舞台上にいる俳優個人に基づいて表現を探っていくからです。

一般的にいうと感情の表現は揺れ動きがあるものですね。なので、一点に突き詰めていくというより、テーマにしたがってその時々で様々な手法を取っています。

稽古の場合は感情表現のほか、ひとつのテーマからインプロでどんどん先に進んでいく、最初のテーマから次へ次へと先に進んでいくという考えです。稽古の様子をご覧いただいたのですが、なにも枠組みがない状況ではなく、私たちの手法はなにかフレームを作り、ひとつの動き、その動作を繰り返すことで、ひとつの感情を突き詰めていくことに焦点をおきました。

この作品は身体性の高い作品なのですが、私たちのポジションとしてはダンスの振り付けではなく身体表現として考えています。振付とってしまうと正しくはないと考えています。身体性を見る者としてユリ・ナエルという人がいますが、振付家とは言わず、身体表現の指導者と言っています。

○**質問者1** 音楽、音について、選ぶ基準があったら教えてください。

○ティート 音楽・音の選び方は作品によって異なります。音楽家、作曲家は稽古の最初の段階から一緒に作り上げていくというやり方を取っています。

音楽に関していうと、音楽または音が作品の中のシーンを導くような音は選ばないようにしています。音楽がその場の雰囲気やリズムを決定するのではなく、音楽はサポート側にまわるといふ基本理念を私たちの選ぶ音楽家も理解してくれています。

○質問者2 今日の『小悪魔』の本番映像を観て思ったことです。身体を使った1つの動き、テーマから作品を作っていくということですが、足を床に踏み鳴らすという行為がよくみられました。

能では足で床を叩くことによって地上にいる精霊を呼び覚ますという意味があり、すり足は精霊と精神的な繋がりをつくるという意味があるらしいのですが、そういったアジア的なもののように見えました。

また、演出家グロトフスキの『貧しい演劇に向けて』を読んだことがあるんですが、身体の中で生まれた衝動が体全身に伝わっていく訓練方法を考えたと言っていました。グロトフスキはアジアやアフリカの祝祭での身体的な動きを使って衝動を探究したそうです。

シアターNO99でも衝動にもとづく、アジアやアフリカの演劇やグロトフスキの演劇の方法論に影響を受けたのでしょうか？

○ティート 近年の世界では情報を得られやすいので、作品によって色々な情報を手に入れることを心がけています。私が演出を学んでいる頃からグロトフスキの書籍はたくさん読んできました。そのグロトフスキの著作のなかにある引用、アジアの演劇への興味はとても正確なものだと信じています。

身体性という足を踏み鳴らすという点で、スズキ・トレーニング・メソッドに着目したものです。アジアからの影響もいなめないでしょう。

人間というのはさまざまな様相があるので、身体というものに着目すると、声をあげる動作、台詞を言う動作、そのようなものにも影響を及ぼすと思います。答えになっているでしょうか。

○質問者2 ありがとうございます。

○質問者3 用事があって途中から参加したのですが、ダンスのような振付ではなく、身体性から出てくるものを演出したとのことでしたが、振付ではなく身体性という辺りがよくわかりませんでした。ひょっとして、振付というのは物語性のようなものとお考えでしょうか。

○ティート 私たちの視点としては、振り付けは古典的な演劇の手法だと考えます。今、情報社会ですが、世界にある全ての情報を収集できているわけではありません。ただ、典型的な振付というのは避けるようにしています。演劇に関係するものと、ダンス、舞踊側と溝があるような気がしていて、そのような方の振り付けを理解できていないということもあるかもしれません。

身体的表現をする際にはメッセージ性が伝わることを念頭に置いています。身体の限界、これまで経験した一番嫌な状況、限界の領域で身体がどのように反応するのが気になりました。身体的表現の際に、一番大事にしていたのは心理的な面で、自分に正直でいること。もしそこで自分に正直でないと、真に突き詰めた表現が表れないと思っています。

言葉だけに頼ってしまうと十分ではなく、この作品においては身体性に重きを置きました。舞台上での表現に限定せず、真の芸術味のある、迫真のあるものを探しています。

○質問者3 もうひとつの質問は、泥や土の上で何故あれほど転げまわったりするのか？ 泥があると怪我をしづらいからですか？

○ティート 泥を使うと怪我をしづらいのではないかと推測もありますが、床面にはリノリウムが貼ってあるので、とても滑りやすく怪我をしやすい危ない状態といえます。

美的な観点からは汚さという表現方法として使っています。

この泥というのは舞台というコンテキストの中で、具体的で変えることができない存在です。現実性を増すという、意味のあるものとして泥を使用しています。

○エネリース 観客と舞台上にいる者の違いを露わにするだけでなく、舞台上の泥の中に俳優たちがいるという結束力を高めるにも意味があったと思います。

人間の深層心理に迫りますが、作品が始まったばかりの時は、すぐに泥にまみれた状態になると団体としてひとつの塊、人間として一つの基盤を持たせた意味があると思います。



○質問者4 質問が3つあります。まず、3番目のパフォーマンスで後ろの窓際に立って動いていた人は何をしていたのか。

○ティート 西洋社会において、このようなキリスト像が置かれることがあ

り、空間がイエス・キリストと繋がっていることを示す場面でもあります。こちらの俳優が実際に何をしているかという内容に関しては、裏にある考えとしては舞台上で起きていることは儀式であって、個人的な物語ではない。儀式であることを示すために宗教の関連を考えました。

この場面ではひとり一番強い男性がいて、他の男性は女性を勝ち得ない弱い男性です。その表現として周りで震えているという表現でした。社会的に鑑みて、人間が α 、 β 、 Γ の3タイプに分けられていて、人間の強さで3タイプのどこに属しているか、その力関係は見過ごせないものがあります。

本作に関して言うと、もし周りの俳優たちが震えていないとしたら、ゆっくりとした儀式的な動作にずっとフォーカスをあてていることが難しいという技術的な面もありました。

日本の演劇者として笈田ヨシさんが著作の中で、観客に背中を向けて立っているということが一番難しいとおっしゃっています。背面を向けて舞台上に長くいるには集中する必要があります。今回、この作品ではシアターNO99の劇団員が結束して、そのような困難な状況を結束力で乗り切ったと思います。

○**質問者4** 次の質問は、3番目と4番目のビデオでは、選ばれたのか、選ばれたくないのかがよくわからなかったなので、それを教えてください。

○**ティート** この作品に限定していうと、どちらのビデオでも男女ともに歩み寄ることが大事だと考えていて、無関心ではなくその関係性を表現しています。素材として使用した小説では三姉妹の中で誰もが男性に選ばれたいという欲望を抱えています。この作品中における表現において、私たちのシアターの女優たちは、実際強い性格の持ち主で、ただの弱い女性というより自立した自信家の表現となっています。

○**エネリース** 私たちの作品は、稽古場で俳優側から生まれた表現ですので、演出家から指示されたものは全くありません。

○**質問者4** シアターNO99設立時に解雇された人たちはお芝居を続けられているのか。

○**ティート** エストニアの社会保障はしっかりしているので、国営の劇場だったので、解雇という表現というのはよくないですが、彼らは国からのサポートを受け、最大10ヶ月分の給料を得ました。解雇された俳優たちの殆んどは他の劇場に入り、演劇を続けています。新しい監督のもの、新しい基本理念に則ったものなので、人材が変わるのは仕方ないことだと思います。

エストニアの演劇は、ドイツとロシアの両方の影響を受けてきました。例えば、ドイツでの演劇界では公営の劇場では新しい芸術監督に変わる時は、劇団員も変わることが慣習としてあります。それに対して、ロシアの演劇界では、劇場に雇用が決まると、その契約は終身雇用となります。

このロシアの演劇界の少し悲しい部分として、終身雇用ということで、実際に演劇を上演する場合、年齢層の高い俳優はあまり起用されることが少ないこともある。

エストニアの演劇界はその両方の極端な方法もなく、終身雇用もないし、芸術監督が変わると一新するというわけではありません。なので、私たちの決断は少しスキャンダラスなことでした。でも、今でもみなさん演劇活動を続けています。

○質問者5 『統一エストニア』に興奮しました。かなり衝撃的な演劇でした。

質問です。『統一エストニア』でEUの議員が壇上に登って、民主主義についてスピーチをしたのはインプロだったのでしょうか？ ほとんどが実際に決められた内容でしたか？

○ティート 殆んどが事前に決められた内容で、実際の文言はインプロでした。

このプロジェクトで一番お見せしたかったのは、選挙という公衆のものでも、実際はコントロールされていて、公正なものではないということです。

EU議員の演説の後、対抗馬は実際エストニアの社会で長年政界入りを望まれた人だったので、国民にとっては新党に所属することが決まるのは現実味のある出来事でした。

私たちは現実と空想の間で、人民のコントロールに目を向けていました。

○エネリース 『統一エストニア』は芸術作品としてのプロジェクトですので、演説するものは、全て事前に決められていたものです。このような現実と区別があまりつかない手法を取ったことで、党大会の参加者にとっても現実味のあるものとして捉えられ、迫真性のある現実として見てもらうことが出来ました。

演劇という文化芸術において、自分の劇場というとても安全な場所から外に出ると、自分たちが使ってきた技術を使いながらもコンテキストが異なります。

○質問者5 ありがとうございます。

○山上 他の方でまだご質問のある方、お知らせください。

○質問者6 インプロを重視しているとの話を聞きました。限界に挑む中で、瞬間的な

衝動がアクションを生むと思いますが、限界に挑むなかで、これはやってはいけない等はありませんか。

○ティート NG行為はありませんが、実際にしたことに対して、これはよかった、悪かったという判断はしています。

当たり前のこととして、俳優がお互いを傷つけることは避けたいと思っていますが、芸術監督の立場として俳優に何かしてはいけないと言うのではなく、俳優同士に任せています。

今回お見せした稽古の映像は第1回の稽古ではなく、中間地点から後半にかけての稽古でしたので、それまでに俳優間での関係性が突き詰められていて、自分たちで判断が出来る段階でした。稽古の様子をご覧いただきましたが、最初のビデオではまだ泥が投入される前でした。

私たちの考えでは、中心にあるのは俳優の行為であって、そのうえに泥があるという考えです。

○山上 ありがとうございます。質問は以上ですか。

○ティート それでは、少し時間があるようなので、最後のビデオをお見せしたいと思います。

泥を使った作品なのですが、泥の使用に関して、人の性質を表すという観点から人間の美しさと愛を表現したいと考えました。「美と愛」の表現方法として考えついたのが、動物の象です。象の共感性に着目したシーンです。

○エネリース 象のシーンは本作品の最終場面になりますが、人間が象に変わるということで、それまで舞台は人間界だったものが、象の表出で舞台がまるで動物園に変わったような印象を受けます。それまで人間界のものとして見ていたものが、これまでも動物を見ていた、なにか見世物を見ていたかのような感情に囚われます。

この作品は舞台と観客の間にガラスの壁があり、このガラスの壁が人間が象を演じている場面で強い意味を持つことになります。まるで動物園のような、それまで人間として見ていたものが、実は人間も動物の一員である、たった1つの種類であることが強調されます。

表現の観点から言うと、衣裳を変えることなく、性質を表すことで外見が全く違った象を表現することが出来ました。人間でいた俳優に対しては一部の観客は共感していたと思いますが、全員ではありません。人間が象を演じている瞬間に観客の共感性が増し

ました。

それでは、最後のビデオ、“Filtth Performance #5”をご覧ください。

(ビデオ鑑賞タイム)

○**山上** 象の群れを見て、理由はわかりませんが、納得させられています。

最後に佐々波さんのコメントをお願いします。

○**佐々波** ありがとうございます。3日間、とても刺激を受けて、私もアーティストですが、ものをつくるという基本的な考え方を改めさせられたというか、アートに対して、ものをつくるのではなく、内なるものを形にしていく、仲間と共につくりあげていくという環境、様々なことを知りました。

3日間、すごく刺激を受けて、これから私たちもいろんなことを自分に問う、かたちをつくる、演劇をつくるにしても、内面を探るというか。

来年、お会いするのがとても楽しみです。

ありがとうございます。感謝です。

○**ティート** 貴重な機会、どうもありがとうございました。

私たち自身、15年の歴史あるシアターの作品を振り返り、内容をみなさんにお伝えするという方法で、自分たちの振り返りをすることが出来ました。

○**エネリース** 私からも感謝申し上げます。本日、私は地理的に移動したもので、前半参加出来ず申し訳ございませんでした。後半の質疑応答に参加出来て嬉しかったです。

振り返りというプロセスを通して、新たな発見をすることが出来ました。

○**山上** ありがとうございます。

予定の時間になりますので、これで国際演劇交流セミナーエストニア特集2021のセミナーを閉会したいと思います。

みなさま、たくさんのご参加ありがとうございました。長時間に渡りまして、本当にご参加ありがとうございました。御礼申し上げます。

記録：菅田華絵

『統一エストニア』党大会でのティート・オヤソーのスピーチ

選挙に勝利することは、いつだって、負けるより良いことだと認めざるを得ません。

3月23日夕方、「統一エストニア」の始動を翌日に控え、どんな思いでいたのか、私は覚えています。新勢力の誕生を告知することとなっていました。私たちは十分な影響力を持っているのか、エストニアはこのようなことを必要としているのか、考えました。その後の50日間について、そしてマスメディアの、政治家の、そして国民の関心について、おそらくここで話をする必要はないでしょう。これらすべてが、エストニアはまさしく、新勢力を要すると証明しました。みなさんのご支援に感謝しています。ありがとうございました。

そして迎えた素晴らしい今日。しかし、思い出してほしいのです。「統一エストニア」は喜びではなく、心配から生まれたのであると。この国の人々を思っの心配です。今日このサク・アリーナに、みなさん、何を期待して来ましたか。新たな政党、それとも盛大な政治ショーでしょうか。後者の場合、期待は裏切られなかったでしょう。前者、新政党への期待であったならば、次のようにとらえたいのです。

このプロジェクトの準備を進めていた際、年配で乱れた白髪、顔色の悪い政治家が訪ねてきて、「エストニア人は農奴である」と発言しました。地下へ連行され、鞭打ちを受ける時点でエストニア人の思考は停止するでしょう。その政治家はもう、何へも期待を持っていませんでした。すべては一様に終わるのだ、と。買収され、変化は訪れない。みなさんはこれに同意しますか。

みなさんはもう農奴ではないはずです。自らの意思がない農奴ではないでしょう。自ら責任を負うことを臆する、農奴ではないでしょう。ひどい目に合わされればむしろ、少なくともこの世界でひとつ、明確なこと¹だと認識するような、農奴ではないでしょう。みなさんは自由なのです。

さて、「統一エストニア」が新勢力であるということについて、少し説明させてください。私たちの新勢力を歓迎いただき、期待していただき、嬉しい限りです。それでも、どうか新勢力を待たないで欲しいのです。変革を約束したレス・プブリカ²が

1 農奴制における、きちんと働けば報酬が、怠ければ暴力を伴う罰が与えられるという明確な構図。現代の政治と対比的。

2 Res Publica、エストニアの保守派政党、活動期間2001年～2006年。

現れたものの、ほかの政党と同様に終わりました。落胆し、そして緑の党³を選ぶも、国会での内部争いを起こしました。落胆したでしょう。イルベス⁴の支持表明に謳い、タランディ⁵に投票しました。もうすぐ、彼らが新しさを失えば、また落胆が待っているでしょう。

誰もかれも、世界は一日で変わると期待しているようです。しかし、私はこの場で、世界は一日で変わるのではない、毎日変わっていくのだと、明確にしましょう。自分で世界を変える意志がない場合、ほかの誰かが変化をもたらすはずです。

誰に期待をかけているのですか。

お願いします、今日ここで、自分と契約を交わしてください。

契約書に、何を望むか声に出し、人々に聞いてほしいことを、エストニアで物事がどうあってほしいかを、しっかり表明する、と記載するのです。署名し、2010年5月7日と記入、ポケットにしまいましょう。そしてそれに従って生きるのです。

ありがとうございました。みなさんは自由です。⁶

『統一エストニア 党大会』の映像：

<https://no99.ee/lavastused/no75-uhtne-eesti-suurkogu/video>

3 2006年結成。

4 Toomas Hendrik Ilves (1953年～)、エストニアの政治家・外交官、2006年～2016年エストニア共和国第四代大統領。

5 Indrek Tarand (1964年～)、エストニアの政治家・外交官。

6 これで以上という意味を含有する。

原文

Ma pean teile tunnistama, et valimisi võita on alati parem kui valimisi kaotada.

Ma mäletan, mida ma mõtlesin 23. märtsi õhtul, järgmisel päeval me pidime alustama Ühtse Eestiga. Pidime teatama, et uusi jõud on sündinud. Ma mõtlesin, kas meil on piisavat jõudu, ma mõtlesin, kas Eesti vajab sellist asja. Ja me ilmselt ei pea teile rääkima nendest 50st päevast, ma ei pea teile rääkima ajakirjanduse, poliitikute rahvahuvist. Kõik see on meile kinnitanud, et Eesti tõesti vajab uut. Ja me oleme sellest, teie toetuse eest me oleme väga tänulikud. Aitäh teile!

Meil on täna siin tore. Aga ma pean teile meelde tuletama, et Ühtset Eestit ei sünnitanud mitte rõõm vaid Ühtne Eesti sündis murest. Murest, selle riigi rahva pärast. Ja kui te täna siia Saku Suurhalli tulite siis, mida te lootsite? Kas te lootsite uut erakonda või lootsite gigantset poliitshowd? Teisel juhul te ei pidanud pettuma. Esimesel juhul, kui te ootasite uut erakonda, ma tahaks mõelda nii, et meiega, kui me seda lavastust ette valmistasime, käis kohtumas üks vanempõlve poliitik hallipäine, sagris juustega, näost veidi hall ja tema ütles, et eestlased on pärisorjad.

Viiakse keldrisse, antakse piitsa ja sinna eestlase arvamine lõppeb. Ta ei lootnud enam millegi peale. Kõik lõpetavad ühte moodi, ütles ta. Kõik ostetakse ära, muutuseid ei tule. Kas sa oled nõus temaga? Sa ei ole endiselt pärisori. Sa pole pärisori, kellel pole oma soove, sa pole pärisori, kes ei julge vastutust enda kätte võtta. Sa pole pärisori, kes mõtleb parem saan peksta, vähemalt üks kindel asi siin maailmas. Sa oled vaba inimene.

Lubage nüüd mõni sõna selle kohta öelda, et Ühtne Eesti on uusi jõud. Mul on väga hea meel, et seda uut jõudu on nii palju tervitatud, et seda on oodatud. Ometi, palun ära oota kogu aeg uut jõudu. Tuli Res Publica, kes lubas muutusi, ja muutusid samasugusteks nagu kõik teised. Sa pettusid, ja sa valisid Rohelisi, nad läksid omavahel riigikogus tülli. Sa pettusid. Siis sa laulusid Ilvese toetuseks, valisid Tarandit. Varsti pettunud nendes, sest nad ei ole enam uued. Kõik ootavad, et maailm muutuks ühe päevaga. Aga ma seisan siin ja ütlen, et maailm ei muutu ühe päevaga, maailm muutub iga päevaga. Ja kui sina ei taha oma maailma muuta, siis muudavad teised maailma sinu eest.

Kelle peale te loodate? Palun, täna siin, tee endaga leping, ja kirjuta sinna, ma ütlen valju häälega välja, mida ma tahan, ütlen välja selle, mida ma tahan nii, et kõik kuulevad, ma ütlen välja selle, kuidas ma tahan, et Eestis asjad oleksid. Võta see leping ja kirjuta sinna alla. Pane see endale taskusse, peale kirjuta veel kuupärv: 7. mai 2010. Pane see endale taskusse ja ela selle järgi.

Aitäh teile! Te olete vabad.

国際演劇交流セミナー2021 エストニア特集に参加して

梅宮万紗子

私は日本で俳優として活動をしています。エストニアの演劇どころか、地理も風俗もあいまいな認識しかありませんでしたが、常々、ヨーロッパの演劇、アートに対する考え方というものに触れたいと思っていたところ、たっぷりとお話を伺うことができました。

国際的に非常に高く評価されている講師のティート・オヤソーさんとエネリース・センペルさんの『統一エストニア』という作品は、舞台上で俳優が演技をするという枠から外れた（普通はほぼこの形だと思うのですが）表現が斬新でした。

彼らの作品『統一エストニア』は、政治を風刺する内容です。そこまではよくありそうですが、実際の本物の政治キャンペーンのような一大プロジェクトなのです。政治家に扮した俳優の特大選挙ポスターが街で、バス停などいたるところに貼られ、本物のような新聞が大量に刷られ、街中で、『統一エストニア』の作品が表現されているのです。おそらく新聞の内容やポスターのスローガンもクスッと笑えるものなのかもしれません。とてもリアルなので本当に立候補するのかと、実際に問い合わせが来たりしたそうです。

また、アメリカの大統領選を思わせる派手な決起集会のような映像作品。歌っている歌手も、花を渡す子供も、泣いている聴衆も、照明が当てられた輝かしい候補者も、全て演出された俳優、ステージという完璧な作り物なのです。まるでどこかの国の本当の選挙中継で、自分は通訳の聞き間違いをしているのかと疑ったほど、リアルで作りこまれたものでした。

例えば、東京の大都会で、大手の新聞と間違えるような新聞が、駅などに置かれ「自由民主党」などありそうな政党名で1メートルサイズの候補者（ここで有名な俳優だったりすると余計面白いかも？）のポスターが、街中に貼られていたら驚きませんか？

「女性の話もよく聞いて、そして再分配に配慮します！」などと書かれていたら？ 本当に練られた議論で、政府を面白く風刺する劇団が実際にあったら、私なら尊敬してしまいます。彼らの作品では政治が派手でお金のかかったものにする必要があるのか、そこに真実はあるのか、という問題提起をしていますね。作品はめちゃくちゃシニールで、大いに笑えるものでした。

エストニアという国はロシア、ソ連、ドイツからの占領と独立を繰り返してきた為、政治への関わり方が私たち日本人とは違うのですが、芸術家の存在意義はとて強いのでしょうか。その証拠に、3日間のワークショップの間に、彼らは愛想笑いの一つもしなかったのです。が、私はそこに、アーティストとして強烈な自負を感じたのです。今回、確信したことは、表現する時は、社会の問題を観衆の生活まで落とし込んで届けるべきだということでした。

ワークショップの質問タイムで、社会の問題を取り扱う際に、政治活動家とアーティストとしての違いを尋ねると、「活動家たちは特定の達成した目標やゴールがあるけれど、自分たちは問題を世の中に提示するところで終わり」と明快でした。それでは中途半端ではと思うところでしたが、ここまで徹底した表現なら、意義もあるというものです。

こうして直接質問ができるのもワークショップの良いところでした。芸術やエンターテインメントの役割を、やはりここなのだと、再確認しました。

私の嬉しい発見は、彼らのプロジェクト・シアターNO99のオープニング作品¹です。なんと三島由紀夫の作品が取り入れられ、俳優は白いハチマキを締めているのです。日本の芸術家が海外でどのように映っているのか、改めて見つめてみたいと思いました。

3日間で10時間強の充実したセミナーでした。日本にいと内向きになりがちですが、まだ外国に行くことができない中で、非常に有難いプロジェクトでした。2022年も新しい企画を楽しみにしております。

1 <https://no99.ee/lavastused/no99-vahel-on-tunne-et-elu-saab-otsa-ja-armastust-polnudki/fotod#1>